



Title	国語教科書における戦争児童文学と家族：「一つの花」に注目して
Author(s)	
Citation	令和5（2023）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書．2024
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95149
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和5年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	やまきはるか 山木晴香	学部 学科	文学部人文学 科	学年	3年
アドバイザー教員 氏名	橋本順光	所属	人文学研究科		
研究課題名	国語教科書における戦争児童文学と家族 ―「一つの花」に注目して―				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				

1 はじめに

日本の小中学校では、国語教育において、戦争を題材にした児童向けの物語(以降戦争児童文学とする¹⁾)を必ず学習する。その教育的役割として、文学的な素養を育むよりも、戦争記憶の伝達形成の一要素や、「平和教育」の一環としての可能性が指摘されてきた。戦争児童文学には、家族を中心に描く作品が多くみられる。戦争児童文学について考えることは、子どもに構築されるべきとされる平和観を考えることにもつながる。筆者はそこに、子どもにとって最も身近な存在である家族を入れることで、先行研究の統合につながるのではないかと考えた。そして、そのためには、子どもの教育や精神形成により深く関わる、小学校の国語の教科書に採用される戦争児童文学の変遷を、テキストのみならず、様々な視点から考察する必要があると思い至った。

また、先行研究をたどる中で、「戦争児童文学」という文学ジャンルそのものの研究史が見当たらないことに気づいた。そこでまずは、戦争児童文学の研究史について、適宜必要だと思われる資料を用いながら、管見の限りまとめることを目的とし、そこから、小中学校の国語教科書における戦争児童文学の採用の史的概観をまとめ、そのうえで、昭和49年から現代の小学校の国語教科書主要四会社²⁾(東京書籍、教育出版、学校図書、光村図書)に採用される戦争児童文学における家族に焦点を当て、どのように家族が描かれているかについて分析を行うこととした。また、その中から複数の国語教科書に最も長く採用されている「一つの花」に注目し、その先行研究にも触れ、そこにおいて言及されていない挿絵の分析から、その捉え方の変遷を解き明かすこととした。

研究方法としては、必要資料の購入・閲覧をし、また、東京都江東区の教科書図書館にて調査を行った。文献調査が中心であり、その成果をこの報告書にまとめたため、冗長なものとなってしまったことご容赦願いたい。

2 国語教科書における戦争児童文学

2.1 戦争児童文学の定義とそれに関する先行研究の整理

ここでは、本論文における「戦争児童文学」の定義づけを行い、「戦争児童文学」に関する先行研究の整理を行う。

2.1.1 戦争児童文学の定義について

¹ 詳細な定義は2.1にて後述する。

² 平成31年度検定版(現行)の教科書まで調査を行えたのがこの四会社であったため、四会社のみで検討を行った。

「戦争児童文学」という言葉は、『日本児童文学大事典³』[1]の長谷川による解説によれば1963年ごろに石上正夫によって使われ始め、そして、1970年代にはほぼ定着したという。石上は『戦争児童文学 350 選⁴』[2]において、「戦争児童文学」ということばをわたしが使い始めたのは、一九六三(昭和三十八)年ごろであった。」と述べている。広義には、「戦争そのものを主題と死、あるいは戦争を重要な背景とした児童文学」だが、狭義には「反戦的、平和指向的意識に基づくもの」を意味する。そもそも、「戦争」とは、日本国語大辞典によれば、「軍隊と軍隊とが、兵器を用いて戦うこと。特に、国家が他国(交戦団体を含む)に対し、政治的意思を貫徹するためにとる最終的かつ暴力的手段⁵」とある。言うまでもないことだが、「戦争」と称されるものは数多に存在する。その中で、本論文中でとりあげる「戦争」とは、第二次世界大戦、さらに言えば、十五年戦争⁶のことである。長谷川は、「戦争児童文学」という言葉が1970年代前後に定着したことから、当初は上記の「十五年戦争を反戦的、平和指向的な立場から取り扱った日本の児童文学をまとめていうもの」であったと述べており、そこから広義の意味も含むようになったという。本稿における「戦争児童文学」の定義は、上述の、「狭義」のものを指すこととする。

2.1.2 戦争児童文学に関する研究史について

ここでは、戦争児童文学という言葉が定着し始めた1970年代前後から、戦争児童文学がどのようにして研究されてきたのかについて適宜重要だと思われる研究を取り上げながら、管見の限りまとめる。『日本児童文学大事典』によれば、1930年前後の戦前・戦中期には、大正期や昭和初期にやや見られた反戦的な作品が姿を消し、軍国主義的作品つまり広義の戦争児童文学が台頭していた。戦後、GHQの検閲等により、好戦的な作品が創作されることはなくなり、早い時期には竹山道雄『ビルマの堅琴』(1948)や壺井栄『二十四の瞳』(1952)などが狭義の戦争児童文学として見られる。しかし、戦後すぐに戦争児童文学の高揚期が訪れたわけではなく、その理由としては、奥野健男(1973)[3]が

政情は占領軍の意向によって刻々に変わり、日本人の思想や心情は、敗戦による挫折、屈辱、不安、平和へのよろこび、希望などの間を矛盾をはらみながら大きく、かつ微妙に揺れ動いていた。⁷

と述べていたように、日本国内において、反戦の意識が高まっていたわけではなかったからだろう。同時期は、竹山や壺井の作品のほかには、子どもが記した戦争体験の記録が多く、原爆に関す

³ 大阪国際児童文学館(1993), p.426

⁴ 石上,時田(1980) p.1

⁵ "せん - そう [・・サウ] 【戦争】", 日本国語大辞典, JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.osaka-u.idm.oclc.org>, (参照 2023-11-29)

⁶ 1931年(昭和6)の満州事変から、1937年の日中戦争、1941年の太平洋戦争を経て、1945年の敗戦までの足掛け15年間の戦争をいう。

(中略)第二次大戦における日本の侵略戦争を、ばらばらに切り離してみるのではなく、密接不可分の関連のもとにとらえ、とりわけ中国や東南アジア諸民族への侵略戦争を重視してとらえる視点にたった戦争認識の呼称として、1931年の満州事変を起点とする十五年戦争という呼称が広く使われ始めた。

"十五年戦争", 日本大百科全書(ニッポニカ), JapanKnowledge, <https://japanknowledge-com.osaka-u.idm.oclc.org>, (参照 2023-12-01)

⁷ 奥野(1973)p.90

るものや海外での戦争経験を記したものが見られる。やがて、1959年、いぬいとみこや柴田道子などが戦時下の庶民や学童疎開を描いたことから、戦争児童文学が注目されその興隆期が訪れ、「戦争児童文学」という言葉も生み出されることになる。いぬいや柴田をはじめとした戦争児童文学を描き始めた作家たちは、青年期に戦争を経験したものが多い。つまり、自己の成長に最も重要な時期と戦争は結びつかざるを得なかったと言うこともできるだろう。それに加えて、終戦から十五年ほどが経ち、戦争を知らない子どもたちが増えてきてしまったことも一因である。石上(1980)は、

当時(筆者註:1963年ごろ)、どの少年週刊誌にも熱血戦争マンガ、血沸き肉躍る戦記が満載されていた。子どもの“カッコいい戦争観”がつくりあげられたのもそのころである。

どこからどう見ても、戦争がカッコいいはずがない。それなのに戦争を知らない子どもたちは、戦争はカッコいいものだと思いこまされてしまった。この子どもたちのゆがんだ戦争観を、どうやって軌道修正するか、当時のわたしの課題であった。(中略)戦争のほんとうの姿を見あやまらないために、戦争を描いた文学作品に出あわせることを考えた。(下線は筆者による)⁸

と述べている。戦争を体験した子どもたちがいなくなり、おそらく、興味を引き読ませるために、戦争を「カッコよく」描いたものが生み出され、それに子どもたちが飛びついた。その反面で、上記引用下線部にあるように、その風潮に対して危機感を抱き、「正しい戦争の記憶」を伝えるべきという考えが生まれた結果、「戦争児童文学」というものが生み出されたのだろう。長谷川も「軍備の強化、少年漫画誌などで戦争を「かっこいい」ものとして描く風潮、真実の戦争体験の風化への危機感などが関連していた。⁹」と述べている。これまで、日本本土においても数多くの戦争が行われてきた。しかし、海を越えた外国から、そして直接的に本土に対して甚大な危害が加えられたのは、十五年戦争だといってよいだろう。戦争による本当の損失を国民が目当たりにして初めて、「戦争児童文学」が生まれることとなった。

そのあおりを受け、1964年、「日本児童文学」[4]という雑誌の8月号において、「戦争児童文学」という言葉自体は使用されないものの、「戦争と児童文学」という特集が組まれた。戦争児童文学作品そのものを論じているもの¹⁰も存在してはいたが、特集の最初は、杉浦明平「戦争と児童文学」¹¹、古田足日「戦争読物をどういう材料でどう書くか」¹²、秋山良照「戦争体験をどのようにつたえたらよいかについての疑問と不安」¹³というように、戦争をどのように児童文学に取り入れ、伝えていくかについて論じられた文が巻頭に寄せられている。「戦争児童文学」というジャンルの研究もほぼ同時期に行われるようになったと言えるだろう。前述のように、上記の三人も、戦争を知らない子どもたちが戦争に対して肯定的に捉えることに対して危機感を抱いている。杉浦は「一口にいえば、戦争はたいへんゆかいなものらしい。血わき肉おどり、日本男子として、戦争で

⁸ 石上,時田(1980) p.1

⁹ 大阪国際児童文学館(1993), p.427

¹⁰ 中井正義「「ビルマの豎琴」の今日的意義」など

日本児童文学者協会(1964)p.32~p.36

¹¹ 日本児童文学者協会(1964)p.5~9

¹² 同上 p.9~19

¹³ 同上 p.20~25

死ぬほど華々しく命ようなことはない一子どもたちはそんな風に目を輝かせて読みふけっている¹⁴」と述べ、その理由として、当時の大人が江戸時代についての解像度が低いように、経験をしていないからどうしてもその現実的な部分に目を向けられないこと、そして子どもには向日性があり、暗い雰囲気回復させるために戦争に対して肯定的でいることやその「のどかな」部分に惹かれたこと、を挙げている。それに加え、秋山は子どもが戦争に肯定的になった理由として、「軍国主義の復活をめざすうごき」¹⁵があったと述べている。自民党が軍国主義を復活させる動きを見せていたり、文学においても国粋主義文学の復活や侵略戦争を許容したりしていると指摘している。その上で、当時出版された戦争児童文学に関しても、それらが反戦的なものであることを肯定したのち、それらの文学は「戦争の本質」¹⁶を正しく捉えられていないのではないかと述べている。古田は、以上の点も指摘しながら、今後の戦争に関する読み物がどのようにあるべきかについて検討をしている¹⁷。詳細はここでは割愛するが、あえて「カッコいい戦争」を描くことによって戦争を批判することや、特攻隊や歩兵部隊など戦争での「むなしい努力」や「軍隊生活の苦しさ」について描くことなどを挙げている。戦争児童文学という言葉が生まれ始めた1960年代においては、まだ戦場の物語が主流であり、それに対抗する物語である戦争児童文学もまた、戦地を描こうとするものであった。また、1964年は、ベトナム戦争が始まった時期でもある。日本に近い地域において、再び戦争が起こってしまったことにより、かつて戦争を経験した作家たちが、その平和を訴える意識を向上させたことも、関係していると考えられる。

このように、戦争児童文学は、戦争を知らない子どもへの平和教育の側面を強く帯びて生まれることとなった。小学校教師であった佐藤(1966)は、以上に述べたものと同じ危険性について触れたのち、実際に児童に読ませた反応を記録している[5]。石川光男「若草色の汽船」、大野允子「つるのとぶ日」、今西祐行「ヒロシマのうた」などの戦争児童文学が、生徒たちの心に残ったという¹⁸。三枝(1966)も、佐藤と同じ雑誌において、すぐれた戦争児童文学として、佐藤暁『誰も知らない小さな国』庄野英二『星野牧場』乙骨淑子『ぴいちゃあしゅん』を挙げ、「新たな国民的連帯をさし招くにたりる主体性の獲得」は上記三作品にみられるような「裡なる平和的な連帯のファンタジーを、間断なくとり出すことによって、はじめてもたらされるもの」¹⁹であると述べている[6]。三枝は当時の教科書における戦争児童文学についても言及しており、

教科書検定では「戦争」はほとんどタブーとされ、社会科の場合はその本質をおおって、かえってそれをロマン的に美化する叙述が要求されている。また国語科の教科書を見ても、「戦争」を扱った教材は、(中略)以外ほとんど見当たらないといった有様である。(中略)忠君愛国調の教材が皆無なのは当然であるとしても、これらの作品(筆者註:ひとつめの(中略)において三枝が挙げていた作品)がほとんど戦争の現実を直接描いていないだけでなく、フランスの作家やユダヤの少女がかいたものであるところから、指導上国民的な視点を用意するためにも、いちじるしく困難な事情が

¹⁴ 同上 p.5

¹⁵ 同上 p.21

¹⁶ 同上 p.23

¹⁷ 同上 p.10

¹⁸ 佐藤(1966)p.866

1. ¹⁹ 三枝(1966)p.862

予想されざるを得ない²⁰。

と強く批判している。以上のように、1960年代において、戦争児童文学はすでに児童文学者や教師に広まり、教育現場に取り入れられたり、教科書に関しての言及が見られたりするようになる。そのような中、1970年には、『日本児童文学』において、戦争児童文学の特集が組まれることとなる[7]。そこでは、主に戦争児童文学の必要性について言及されており、渋谷清視「戦争児童文学の外観と今後の課題」²¹、来栖良夫「戦争・ノンフィクション」²²、石上正夫「戦争児童文学の周辺」²³といったような児童文学者たちが、普及してきた戦争児童文学が今後どうあるべきか、ということについて論じている。渋谷は、1970年までに出版された児童文学を分類したうえで、戦争児童文学の作家たちが青年期に戦争を経験したことからそのほとんどが「被害者意識」が前面に押し出された作品であることを指摘している。日本人が被害者であったと同時に加害者であったということも意識させなければならないと同時に、「戦争への怒りや憎悪」だけではなく「平和と民主主義への限らない愛情²⁴」をもって、子どもたちに興味と感動を抱かせる作品を作っていかなければならない、と述べている。石上は、当時の戦争教育について言及し、新軍国主義を推し進めるため、愛国心や防衛思想を育むために、教科書における戦争の記述が形骸化されたり、ゆがめられたりしていると批判している。

戦後、社会科教科書の原爆教材は、体験をまじえて具体的に表現されていた。ところが、次第にその記述は形式化され、年表化、年後以下されてきてしまった。国語教材(学図・三年・上)では、広島は美しく豊かな都市をたずねる紀行文としてあつかわれ、原爆のことには一さいふれられていない。²⁵

と石上は述べ、1970年代にこそ、十五年戦争の時代の真実を捉え、「人間と戦争の一分野を追求するすぐれた児童文学²⁶」の誕生に期待している。

国が軍国主義化を推し進め、戦争の事実をゆがめようとしている中で、児童文学者や教師によって、戦争児童文学を用いた教育は重要視され、その必要性が叫ばれていたのである。それによって、1974年ごろから、国語教科書における戦争児童文学の採用が大幅に増大することとなる。向川(1995)は、そのような児童文学者の戦争児童文学での姿勢に触れ、それが教科書への採用の増加につながったと述べている²⁷[8]。戦争児童文学の教育への普及を叫ぶ児童文学者たちが、民間の教科書会社の編集に携わっていたこともそれを加速させたと考えられる。また、福田(2005)は、その要因として、1965年に起こった教科書裁判によって、教科書検定制度が問題視され、民間の教科

²⁰ 同上 p.51

²¹ 日本児童文学者協会(1970)p.17~p.26

²² 同上 p.27~p.31

²³ 同上 p.37~p.43

²⁴ 同上 p.23

²⁵ 同上 p.38~p.39

²⁶ 同上 p.43

²⁷ 向川(1995)p.70

書の採択範囲が広がったのではないかと²⁸と考察している[9]。また、1970年代前半は、沖縄返還や日中の国交回復が行われるなど、国を挙げて軍国主義を掲げることができない風潮になり、むしろ「平和」を掲げなければならなくなった、ということも一因だと考えられる。このようにして、戦争児童文学の教科書への採択が増え、詳細は後述するが、1996年にはその採択数はピークを迎える。教科書への採択増加以降、戦争児童文学は国語教育と密接なかかわりを持ち、戦争児童文学というジャンルの在り方や、個々の作品の文学的な研究というよりも、「どのように教えるか」「どんな授業が好ましいか」といった、教材研究をはじめとした、教育の分野において研究されるようになっていく。しかし、1970年代後半ごろ、自民党による国語教科書攻撃が行われた。国語教科書に掲載されている物語の執筆者が、共産党系や日教組関係者に占領されてしまった、と自民党は主張したのである。その中で、「戦争児童文学と民話に根をおろした作品²⁹」に非難が集中している。古田(1981)は述べ、それが「戦前の作品とは違った価値を創出している」からであるとしている。鳥越(1981)も、「今回の児童文学に対する非難・攻撃は決して作家や作品への文学的批判でもなければ、国語教育的見地からの教育論議でもないのである。ここにあるのは、自民党の立場から見た、反共主義の憎悪のみである。³⁰」と批判している。このように、児童文学者協会は自民党からの攻撃に強く抗議し、国語の教科書から、戦争児童文学が失われることはなかった[10]。

この問題を受け、1980年代においては、再び戦争児童文学を教育の場において如何に使用していくかについて、議論が交わされることとなる。石上正夫・時田功(1980)によって『戦争を知らない子どもたちへー戦争児童文学 350 選』[2]が編まれ、渋谷清視(1983)『平和を考える戦争児童文学●子どもに何をどう読ませるか』[11]が出版される。どちらも、自民党の攻撃が始まる前に執筆が始まったものではあるが、同時期に世の中に発表されたことによって、戦争児童文学の教育的意義の再考の一助となったと考えられる。大槻(1983)はこの攻撃を受けて、戦争児童文学の意義として戦争の悲惨さを認識させるだけでは不十分とし、「戦争を平和の問題を自分生き方にかかわる問題として考えさせ、(中略)現実認識の力を育てること³¹」であると述べた[12]。1990年代にはいると、長谷川(1995)によって、戦争児童文学の全集である、『戦争と平和』子ども文学館』が出版される。彼はその別巻にて、戦争児童文学について、そして、戦争児童文学がこれまでどのような広がりを見せてきたかについてまとめている[13]。また、同年『日本の戦争児童文学 戦前・戦中・戦後』も出版し、戦争児童文学史をまとめることとなった[14]。ここで興味深いのが、戦前の戦争児童文学、つまり広義の戦争児童文学にも目を向けていることである。長谷川は

なぜ戦争への突入を止められなかったのか、なぜおとなも子どもも戦争をまるまる肯定してしまったのかということは、戦争を知らない世代が投げかける大きな疑問の一つである。その疑問の一部に答えるためにも、戦前および戦中の戦争児童文学を検討しなければならない。³²

と、戦前・戦中の戦争児童文学を検討する意義を述べている。そして、その長谷川の書籍を土台として、鳥越・長谷川(2012)により、『はじめて学ぶ 日本の戦争児童文学史』が出版される

²⁸ 福田(2005)p.60

²⁹ 日本児童文学者協会(1981)p.34

³⁰ 同上 p.11

³¹ 大槻(1983)p.73

³² 長谷川(1995)p.8

[15]。第一部は戦前から現在に至るまで浅草寺度文学の歴史をまとめ、第二部では科学戦争や絵本、ファンタジーなどのジャンルにおける戦争児童文学や戦争児童文学における中国、ロシア、英米などの描かれ方を分析しまとめている。2000年代以降教材的研究が進められる中で、戦争児童文学の通史が一つのジャンルとしてまとめられるようになったのである。

ここまで、必要と思われる論や資料を適宜引用しながら、戦争児童文学の研究史についてまとめた。誕生から、平和教育と不可分であった戦争児童文学は、その存在意義やどのように「戦争」を描いていくかについて論じられることが多かった。国語教育に取り入れられ、その教材的研究が進められていく中で、ジャンルとしての地位を確立し、通史としての研究もなされるようになっていったのである。

2.2 小学校国語教科書に掲載された戦争児童文学について

2.1において、戦争児童文学がどのように生み出され、児童文学の内の一つのジャンルとして定まり、その研究がどのように行われていったのかを確認した。この節では、小学校国語教科書に掲載された戦争児童文学をまとめ、それぞれの作品の外観を示す。その中で、小学校国語教科書に掲載された戦争児童文学がどのような変遷をたどっているのかを考察する。福田(2005)³³[8]において、昭和31年度から平成14年度版までの、国語教科書に掲載された戦争児童文学がまとめられていたため、平成14年度版以降から平成31年度版までの、戦争児童文学についてまとめた。添付している資料1がそのまとめた表である。福田のまとめと合わせて、昭和31年度から平成31年度版までにおいて、主要四会社にて採用された戦争児童文学は28作品であった。

2-1でも言及したように、戦争児童文学は1974年版から大幅に採用が増えていくこととなる。福田によれば、1974年までにおいて、学校図書・教育出版の5年生の教科書にドーテ『最後の授業』のみが掲載されており、1974年、学校図書2年生に『かわいそうなぞう』が採用されたのをはじめとして、5作品へと増加した。昭和52年度版では、その数が一気に9作品へと増え、昭和55年度版には14作品で種類としては最高、昭和58年度版では11作品、昭和61年度版から平成4年度版では12作品、平成8年度、平成12年度には11作品、と種類としては緩やかに減少しているが、「一つの花」など共通して採用されている作品を含めるとその採用数は増加している。しかし、平成14年度版から、8作品、「一つの花」は付録化され、平成17年度版、平成23年度版は7作品、平成27年度は8作品、そして平成31年度(現行)は7作品と、最も採用された時期と比べると、半数以下に減少している。

物語の内容に関して言えば、昭和49年度は、戦場の物語「救命艇の少年」も掲載されており、銃後の物語「かわいそうなぞう」「春先のひょう」「最後の授業」など、戦時中に翻弄される人々の物語が中心であった。昭和52年度版以降採用された「一つの花」、「石うすの歌」、「村一番のさくらの木」「お母さんの木」もそれに含まれる。その中で「ヒロシマのうた」は戦時中の、原爆が落とされた広島市の描写は巧みではあるが、その戦後の物語に焦点が当てられている。また、「ヒロシマのうた」「石うすのうた」「母さんの歌」「川とノリオ」など、原爆を主題にした物語が増えていくことになる。低学年においては、直接的な戦争の描写ではなく、「かわいそうなぞう」や「チロヌップのきつね」など、戦争によって命を落とした動物の物語が採用されており、また、高学年では「空の騎士」「最後の授業」というように、海外での戦争児童文学を翻訳した物語も採用され

³³ 福田(2005)p.54~p.59

ている。昭和 61 年度版になると、「かわいそうなぞう」のかわりに、「そして、トンキーもしんだ」、平成 4 年度版には「ふるさとの空に帰った馬」などの動物をテーマとした戦争児童文学が教育出版の二年生で採用されるが、平成 8 年以降、主要四会社において、低学年での戦争児童文学の採用は見られなくなった。中学年、高学年においては、昭和 61 年度、光村書店の「ちいちゃんのかげおくり」や、教育出版「お母さんの紙びな」、「一つの花」、東京書籍「すいかの種」など、小さな子どもを主人公にした物語が多くを閉め、家族を亡くしたり、欲しいものを手放したりと、子どもが感情移入しやすい物語が中心になっている。高学年は学校図書「山へ行く牛」「お母さんの木」「春先のひょう」と、上述した原爆を主題にした物語であった。そのような中、平成 4 年の学校図書において、「ロシアパン」が採用される。日本の戦争に対する被害者意識ではなく加害者意識に焦点を当てた作品が採用されたのである。平成 8 年度版には「父ちゃんの凧」も採用し、戦争観の多面化を図っている。平成 14 年度からは、低学年、中学年での採用を取りやめたが、平成 27 年度から「一つの花」を「しりょうへん」に掲載している。一方で東京書籍は平成 12 年度に「悲劇の少女アンネ」平成 4 年度からは、長年採用した「一つの花」から「世界一美しいぼくの村」へと変更している。海外で起こった戦争を教材にすることで、戦争が過去のものではないということ生徒に伝えている。光村図書は、平成 14 年度から、高学年における戦争児童文学の採用を取りやめその代わりとして「平和のとりでを築く」という説明的文章を教材に戦争を取り上げて、その後も六年生の教材に使用している。同じように学校図書でも「フリードルとテレジンの画家たち」という説明的文章で戦争を取り上げている。また、平成 23 年度東京書籍「いわたくんちのおばあちゃん」、平成 31 年光村図書「たずねびと」というように、戦争を知らない子どもたちを主人公にして、戦争を学んでいく中で、成長する姿を描くものもみられていくようになる。

このように、教科書に採用される戦争児童文学は年々減少し、その傾向は、戦時中の人々の生活を描いたものから、海外での戦争や説明的文章、戦争を知らない子どもたちが戦争について学び成長する話に変化しているのである。

2.3 小学校国語教科書の戦争児童文学における家族の描き方

2.3 では昭和 49 年から現代の小中学校の国語教科書に採用される戦争児童文学における家族という存在に焦点を当て、どのように家族が描かれているか検討する。2.2 において、教科書に採用される戦争児童文学の傾向は変化しているものの、その多くは家族を中心に描かれているものが多い。児童文学において、家族という存在はそれと密接な関係を構築するものであり、児童文学に展開される家族空間には多面性がある。ここでは、国語教科書に採用された戦争児童文学における家族に注目しながら、分類分けを行い、その描き方について考察する。

まず、家族が描かれていると考えられる物語を会社関係なく列挙していく。

「春先のひょう」「一つの花」「石うすの歌」「村いちばんの桜の木」「お母さんの木」「ヒロシマのうた」「空の騎士」「母さんの歌」「川とノリオ」「すいかの種」「お母さんの紙びな」「ちいちゃんのかげおくり」「山へ行く牛」「ロシアパン」「おはじきの木」「父ちゃんの凧」「悲劇の少女アンネ」「世界一美しいぼくの村」「いわたくんちのおばあちゃん」「たずねびと」の 20 作品である。28 作品の中の 7 割以上を占めるほど「家族」を題材にした戦争児童文学が多いのは、その学習者である児童の世界が、主に学校と家庭で成り立っているからであろう。保護者に育てられ、その存在が当たり前だと思っている児童たちにとって、「家族」を題材にした物語は感情移入しやすく、その心情や言動に対しても理解ができる。戦争を知らない彼らが、戦争を題材にした作品を学ぶには、その環境が自らに近しいものである方が好ましいのである。

以上にあげた戦争児童文学を分類する上で、大きな点としては、「家族との別れが描かれているかどうか」にあると考える。戦争によって、離れ離れになってしまった家族の形は、戦争という不可抗力のむなしさや悲しみを強調する。それに該当する作品は、「一つの花」「石うすの歌」「村いちばんの桜の木」「お母さんの木」「ヒロシマのうた」「母さんの歌」「空に浮かぶ騎士」「川とノリオ」「すいかの種」「ちいちゃんのかげおくり」「山へ行く牛」「おはじきの木」「父ちゃんの凧」「悲劇の少女アンネ」「世界一美しいぼくの村」「いわたくんちのおばあちゃん」の15作品であろう。

「春先のひょう」「お母さんの紙びな」「ロシアパン」「たずねびと」はいずれも、主人公の家族と離れ離れになったという形で家族を描いているわけではない。「春先のひょう」「お母さんの紙びな」は、戦時中に苦しい思いをした主人公が、その体験を子どもに語る、伝えるという形での「家族」が描かれている。その戦時中においても、前者は夫との出会い、後者は母親との思い出と、不幸の中でも家族の暖かさを描く物語である。「ロシアパン」は、「ロシア人」だからという理由で住んでいた土地を離れなくてはならなかった親子を、主人公が思い出すという形で、「たずねびと」は兄と共に、自分と同じ名前の戦没者をたどる物語であり、共に学び成長する兄妹という形で、家族を描き出している。では、先ほど述べた15作品をさらに分類していく。それは、その別れが家族の死によるものかどうかである。家族が亡くなっているかどうか定かではない作品として、「山へ行く牛」「世界一美しいぼくの村」が挙げられる。この二作品は、それぞれ父と兄が戦争へと向かい、未だ帰ってきていない。戦争の恐怖におびえながらも、日常生活を送る中での出来事に家族への想いを重ねるさまを描き出している。残りの13作品は、何かしらの形で、家族を失ってしまったという物語である。その中で最も多くの作品で取り上げられている題材として、八月六日のヒロシマが挙げられるだろう。「石うすの歌」「ヒロシマのうた」「母さんの歌」「川とノリオ」「すいかの種」「いわたくんちのおばあちゃん」において、一日にして家族を突然失ってしまった人たちの物語が描かれる。特に、「石うすの歌」「川とノリオ」「すいかの種」は八月六日にヒロシマへと向かい、そのまま帰ってこなかった家族の死を半ば受け入れられず、茫然自失となる様、それでも動いていく日常が描かれている。「母さんの歌」は母親を求める赤ちゃん、その子に歌を歌う女学生が、ともに母親を想いながら死んでいく様子が描かれる。「ヒロシマのうた」は八月六日に水兵に救い出された少女が育ての家族との軋轢に悩むうち、記憶にもない母親の面影を水兵に問いかけ、やがて育ての親と向かい会おうとするさまを描いている。「いわたくんちのおばあちゃん」は、原爆によって自分以外の家族全員を失った経験から、自分の孫をはじめとした子どもたちに、同じ思いをしてほしくないと願い、その想いを娘である「いわたくんのおかあさん」が継承する、二度と家族を失いたくない想いが描かれている。では、後に残った「一つの花」「村いちばんの桜の木」「お母さんの木」「空に浮かぶ騎士」「ちいちゃんのかげおくり」「おはじきの木」「父ちゃんの凧」「悲劇の少女アンネ」のうち、「ちいちゃんのかげおくり」「おはじきの木」は、二度と帰ってこない家族を待ち続けた少女の物語である。「ちいちゃんのかげおくり」のちいちゃんも、「おはじきの木」のかなこもまだ戦争を理解するには十分幼く、その幼さ故、二度と帰ってこない家族をいつまでも待ち続け、いのちを落とす。いつか会えると信じて家族を待つ健気さや無知であるからこそその虚しさを表出している。「おはじきの木」はかなこが亡くなったあと、その父親であるげんさんが、かなこの亡くなった木を訪れ、不思議な出会いをするという、父親から娘への悔やみ、悲しみも描かれている。そんな幼さゆえの無知が描かれている作品として、「一つの花」も挙げられる。この作品にみられる家族像については、後述する。「村いちばんの桜の木」は、戦争で亡くなった夫の石碑の代わりに桜の木を植えた女性が、年月が経ち再びの戦争で桜が切られそうになった時に、身を挺してその木を守ったことによって、夫への愛、そしてさらに戦争へと駆り出さ

れてしまった子どもや孫への悔しさが描かれている。そして、「空に浮かぶ騎士」「悲劇の少女アンネ」はそれぞれ、南北戦争、ユダヤ人大量虐殺を題材に描かれているが、そこに描かれる家族についても同様である。敵側へと行ってしまった主人公に父親がかけた言葉や、その父親を自らの手で殺してしまった主人公の絶望、隠れ家でいつ見つかるかもわからない恐怖と戦い、それでも希望を見出そうとした少女とその父や母、姉、恋人とのつながりがそれぞれの作品には描かれる。特に後者は、「ちいちゃんのかげおくり」や「おはじきの木」の主人公が持つ、再び家族で日常を過ごすというわずかな希望を抱き続ける点で共通しているだろう。

ここまで、主要四会社に採用された戦争児童文学において、家族がどの様に描かれているか、その「別れ」に注目して分類と検討を行った。その作品の多くが戦争が生み出した、苦しみや別れという暗い状況の中で、離れ離れになった家族を想い、再び出会えること、その苦しみが二度と来ないことを祈っているのである。

3 「一つの花」について

「一つの花³⁴」は今西祐行初期の戦争児童文学である。その生涯は、関口(2004)にくわしい[16]。今西(1923~2004)は、大阪の枚岡に生まれ、奈良の生駒市で育った。早稲田大学童話会に入会し、そこで書いた「ハコちゃん」にてデビューをした。1943年、海軍の海兵隊に入隊し、1945年8月6日、広島県の呉市川原石にて迎え、原子爆弾投下直後の広島市にて救護活動に携わることとなる。ここでの今西の経験はのちの作品(「ヒロシマの歌」など)に多大な影響を与えることとなる。終戦後復学し、早稲田大学を卒業した今西は、編集者として出版社を転々としながら、同人誌を作ったり、新聞に短編の童話を掲載したりしながら、少しずつ短編作家の道を進んでいくこととなる。その初期、1953年に小学館の雑誌『小二教育技術』にて、初めて「一つの花」は発表されることとなる。「一つの花」はその初出といくらかの異同が見られるものの、その後彼の童話集『そらのひつじかい』等に掲載され、2.2で触れたように、多くの教科書会社に採用されることによって、彼の代表作品の一つとなっていく。ここでは、その「一つの花」について、その先行研究の整理を行った後、その家族の描き方について考察し、国語教科書における挿絵の変遷をたどることとする。

3.1 「一つの花」に関する先行研究の整理

「一つの花」に関する研究は、大きく文学作品としての研究と教材としての研究の二つに分けることができる。前述のとおり、「一つの花」は国語科の教科書に多く採用されてきたことから、文学作品というよりも、国語教材として、「どのようにしてこの作品を生徒に教えるか」「この作品で生徒の何を育てられるのか」という視点を中心に論を進められることが多い。そのため、ここでは、「一つの花」に関する研究をその二点に分け、その概観をまとめることとする。しかし、研究によ

³⁴ ここで、「一つの花」における簡単なあらすじを付す。

「一つだけちょうだい」は、ゆみ子がはっきり覚えた初めての言葉だった。なんでも「一つだけ」ちょうだい、とねだるのだ。そんなある日、お父さんが戦争へ行くことになる。見送りに行ったゆみ子は、「一つだけちょうだい」と言っておにぎりを全部食べてしまう。おにぎりが無くなって泣きじゃくるゆみ子を見て、お父さんはどこかへと行ってしまふ。お父さんは、駅の隅に咲いていたコスモスの花を一本、ゆみ子に渡し、戦争へと行ってしまった。十年後、ゆみ子はコスモスの花にあふれた家から、お買い物へと向かうのである。

ってはその両方の要素を備えているものもあるため、その際はどちらの要素が大きいかわ著者が判断し分類を行っている。

3.1.1 文学作品としての研究

今西祐行作品の研究者として、まず初めに、三井喜美子の名が上がるだろう。三井は卒業論文に今留留文科大学の卒業論文で今西を取り上げてから、小学校勤務を経て大学院へと戻り、今西作品の研究を行いながら、『今西祐行研究』の編集にも参加した児童文学者である。教材研究としてではなく、文学作品として、今西作品の研究を行った人物である。「一つの花」に関しても、「一つの花」の初出と異本の考察(1979)[17]と、「奇蹟の花—願いの文学「一つの花」論(1984,1998に加筆修正)[18]にて論文を執筆しており、前者においては、「一つの花」の初出誌を突き止め、それと『そらのひつじかい』との食い違いや、改題作品である「コスモスの庭」との比較検討を行っている。また、出版が確認されている十四の「一つの花」を取り上げ、その本文異同や改変から、その展開を追っている。そして最後に、今西作品の今後の課題として、以下のような点を挙げている。少々長くなるが、重要であると考えため、引用する。

「一つの花」は教材として好まれているがために、教材解釈的研究に偏りがちである。教材解釈や実践記録、教材研究の類は幾多も公表されているが、にも拘らず今日までテキストの違いが問題にされてこなかった。(中略)現代児童文学の場合、テキストクリティックが軽視されているのは否めまい。しかし、確実な実践をするためにも、又、今後の今西文学 研究の発展のためにも、「一つの花」を教材としてではなく、もう一度文学の土俵上でとらえ直すことが必要とされているのではなかろうか。文学教材とは文学作品であることを忘れてはならないのである。教材というレッテルを取り除き、もう少し広い視野に立った文学的研究が試行されるべきであろう。³⁵

このように、「一つの花」の文学的な研究がなされていない点について言及している。前にも述べたように、教科書に採用される文学作品はその作品そのものの文学研究がなされていないことが多い。三井も(中略)において今西の他の作品にもそのようなきらいがあると述べ、それが、『今西祐行全集別巻』における『今西祐行研究』の編集につながったのだろう。その中に収められている、「奇蹟の花—願いの文学「一つの花」論」では、今西祐行を「直接に訴えるよりも黙して読者の想像に委ねてしまう、ストレートに伝えるよりも抒情的に譬えてしまう³⁶」作家としてその譬える方を「願いの文学」と名付けたうえで今西作品を捉えようとしている。「一つの花」が創作された当時の今西の内的状況を、彼が当時記した文章から読み解き、なぜ「願いの文学」と名付けたのかについて言及している。また、そこから「一つの花」が抒情的である理由について本文を取り上げ考察し、最後は文体に言及し、その文学的価値を示している。「一つの花」を論じるにおいて、当時の今西祐行そのものに焦点を当てるのが、国語教材としての研究との大きな違いと言えるだろう。「一つの花」創作は、彼の子育ての経験が大きく関わっている。「一つの花」のこと³⁷において、今西は「一つの花」が創作された当時を振り返って記している³⁸[19]。三井は、今西のそ

³⁵ 三井(1979)p.82

³⁶ 三井(1989)p.91

³⁷ 今西(1989)p.84~86

³⁸ 彼は、娘が誕生した直後、職を転々としていたため、当時非常に貧しく食にも困っていたという。そこで、彼の妻が「一つだけ」と口にしていたのを幼い娘が覚え、繰り返していたのである。そのよ

の想いと、彼のヒロシマでの経験やそれをもとにして生まれた作品とをつなげ、「わが子の発した「一つだけちょうだい」の言葉へのこだわり、原爆の子らへの平和への悲願の叫びが重ね合わされて形象化された」と「一つの花」を位置づけている。

三井の「一つの花」に関する二つの研究の間に、2.1.2でも取り上げられた、国語教科書攻撃が行われた。「一つの花」もその対象であり、今西を「「社会主義とヒューマンイズムを基調とし、一貫して真実を求めて生きる人間の姿を描いてきた」といわれている左翼作家である」とし、「不当な「誇張と省略」により、「あ反戦平和」をたくみに党派的な主張につなげている」と非難した³⁹。これに反論する形で前川が「《作品を論じる》たつまきの光景」と題して、「一つの花」を論じている。前川は論点として今西が左翼作家と決めつけられていること、戦争児童文学が「不当な「誇張と省略」以降の行為につながることを挙げ、その指摘が飛躍している根拠をもって述べている。作品終盤の、「それから、十年の年月が過ぎました⁴⁰」以降の場面における意外性の巧みさについて、今西の年譜と照らし合わせながら、

妻もなく、子もなく、たった一人で戦場へ行く青年の悲しみと、もしかすると自分もそうだったかもしれない若い父親の願いを、ゆみ子の中に描きこんでいる。結びのゆみ子の明るさ、無邪気が、作者の願いなのだ。⁴¹

と、「一つの花」の最後の場面を結論付けている。同書にて今西自身も「一つの花」について述べ、国語教科書攻撃の意図の恐ろしさについて述べ、「人間の想いというものはあのコスモスの花のように美しく強いということを歌いたかったのだが。⁴²」と締めくくっている。

同時期、鈴木(1980)は、「一つの花」の抒情批判を行っている[20]。鈴木自身は小学校の教師であり、前半は授業実践について述べているが、方法論よりも作品論を重要視しており、『日本文学』29巻において彼女の作品論について言及している。お父さんが一輪のコスモスをゆみ子に与えた場面から、「急速に抒情に埋没してゆく」とし、「あまりにも安手に救いすぎている。その甘っちょろいヒューマンイズム、ロマンチズムがいただけない」と述べている⁴³。その上で、受け取るのではなく、投げ捨てたほうが、「食糧難時代のリアリティを保障する」と提言している。また、ゆみ子たちの家がコスモスの花に囲まれる最後の場面でも、「ここにはいったいどんな戦争の傷跡があるというのだろうか。⁴⁴」と批判している。コスモスの存在について、家父長制の生き残りを読み、戦後民主主義の虚妄とまで表現し、「コスモスの花群に包まれることによって、戦争の悲惨さや傷跡は甘美な抒情に液化する⁴⁵」と結論付けている。三井(1989)はこの鈴木論を取り上げ、今

うな中で見つけた、終。戦後のトタン屋根ばかりの家に、コスモスやオシロイバナが咲き誇っている光景を彼は「美しい」と感じ、住んでいる人や戦争で亡くなった戦友を思い出し、「一輪のコスモス」に子どもへの幻想を重ねていたのである。

³⁹ 前川(1981)p.165

⁴⁰ 『今西祐之全集4』(1987)p.13~p.15

⁴¹ 前川(1981)p.175

⁴² 今西(1981)p.178

⁴³ 鈴木(1980)p.51

⁴⁴ 同上

⁴⁵ 同上

西が「なぜそうしなかった」のかに触れながら、鈴木 of 提言ではフィクションではない、「生のまま」の悲劇が表現されてしまう」と述べ、「明るさとは別に、一輪のコスモスはもの哀しく揺らめいて印象に残る。戦死した父親のイメージが強烈だからだ」⁴⁶と反論している。

その後しばらく「一つの花」の文学的研究を見つけることはできなかったが、森本(2002)が、「一つの花」の「事実と虚構」「作者の思い」「忘れられたお父さん」と三つに分け、作品を論じている[21]。森本は、「一つの花」に対して「リアリズムの精神で太平洋戦争末期の日本を描いたのではなく、戦争下に「一つだけちょうだい」としか言えなかった娘に対する父親の心配と愛情を描いたファンタジーとして読むべき」⁴⁷と述べている。一見、事実を述べたように見える「一つの花」の矛盾する点を取り上げ、そこに今西の表現したかったものを考察し、あくまで「一つの花」が「虚構の中のファンタジー」であるとしている。その上で戦争の場面を実体化してとらえる従来の指導案に批判的な視線を投げかけているのである。この論は、鈴木 of 論に対する三井の反論に通ずるものがあると考えられ、「一つの花」が、今西が実体験をもとにしながら描いたフィクションの世界であるからこそ、「願いの文学」なのであろう。

関口(2004)も、「一つの花」の抑制された文体によって、お父さんが戦争へと行く場面においてお母さんが発した「バンザーイって……⁴⁸」という言葉の持つ様々な意味や、最後のゆみ子たちの家がコスモスに囲まれる場面の考察を行っている。そして、その無駄のない的確な文章が、「一つの花」の教材たらしめる所以であると述べている⁴⁹。

3.1.2 国語教材としての研究

3.1.1 にて三井が言及していたように、「一つの花」はその共通教材ぶりから、多くの教材としての研究が行われている。しかし、量が多くこの報告がさらに冗長なものになってしまうため、本節ではその概観に留め、列挙の形となってしまうことをご容赦願いたい。森本(2002)は、1972年～1999年における「一つの花」実践研究についてもまとめている。「一つの花」が初めて教科書に採用されたのは、1974年の日本書籍であり、それよりも前に、「一つの花」についての教材研究が行われていたということになる。佐藤(1966)が、戦争児童文学という言葉が普及する前から授業を行っていたことを鑑みれば、授業への意識の高さは容易に想像できる。主に、登場人物の気持ち、細かい表現に注目させ、生徒に感想を書かせるもの、父母や祖父母に読み聞かせてから反応を聞き、感想を書かせるものなどが実践として挙げられている。小林(1992)は、「一つの花」のすべての文の構造を読み解き、また、「一つだけ」という言葉や表題の意味に関して述べている[22]。また、渥見(2002)は、先行作品論・教材研究を比較することによって「一つの花」についての考察を教材論的に深めることを試みている[23]。三好(2009)はその教材性について、先行研究を用いながら、「一つの花」の教材としての問題点について述べている[24]。小出(2016)は、学習材としての「一つの花」の特性について述べたうえで、指導方法の工夫として、ワークシート・板書・グループワークの工夫について言及し、具体的な単元構想を展開している[24]。岩崎(2019)は、具体的な学習計画を立て、結末場面について論じた後、実践を行ったうえで、第一回と最終回の授業での生徒の反応について述べている[25]。このように、様々に教材研究、実践研究が行われているが、「一つ

⁴⁶ 三井(1989)p.107

⁴⁷ 森本(2002)p.66

⁴⁸ 『今西祐之全集4』(1987)p.13

⁴⁹ 関口(2004)p.115～p.121

の花」の教材的研究の特異な点としては、教材論で、一冊の本が複数種類出版されていることであろう。関口(2004)は石川宏子『一つの花の授業⁵⁰⁾』を例として挙げている。他に筆者が確認したものだと、日浦(1991)『教材研究の定説化 1 「一つの花」の読み方指導』、渋谷・市毛(1997)『「実践言語技術教育シリーズ」 第6巻 一つの花』、雁(2004)『授業ハンドブック 2 「一つの花」全発問・全記録』、大越・西田(2011)『教材別・単元展開の可能性に挑戦する 3 「一つの花」の授業』、山口(2013)『一つの花改訂版 教材分析と全発問 (文学の授業)』、辻(2016)『文芸研の授業シリーズ 2 一つの花』などの6冊が挙げられる。大越・西田(2011)は教材としての「一つの花」のポイントまとめたうえで、音読・戦争平和について考える・自分の「今」を考えて読むといったような単元案を展開している[26]。辻(2016)は、「一つの花」について、接続詞や比喩に注目しながら詳細に分析したうえで、授業提案とその実施についても述べている[7]。今回、実際に書籍を確認できたのはこの二冊のみであるが、授業の進め方に大きな違いが見られ、多様な読みが可能であることを示している。

3.2 「一つの花」における家族の描き方

2.3において、戦争児童文学における家族の描き方について、また、3.1において、「一つの花」における先行研究の確認を行った。ここでは、さらに具体的に、「一つの花」において、家族がどの様に描かれているかについての言及を行う。

まず、この物語の登場人物は、お父さん、お母さん、ゆみ子であり、父母娘の三人家族である。大沢(2016)が指摘しているように、当時は祖父母―父母―子の三世代家族が一般的であり、また、兄弟姉妹の人数も多い⁵¹⁾。対して、「一つの花」の家族は親子の二世代のみであり、子どもはゆみ子一人だけである。その理由としては、今西がこの物語を執筆したのが戦後であるために家族形態の一般が変化してしまっているから、また、前述したように、彼自身の家族が大きく投影されているからであると考えられる。

「一つの花」は、大きく四場面に分けることができる。⁵²⁾①「一つだけちょうだい」とゆみ子がいい、それにお母さんが答える場面②ゆみ子に対して、お母さんとお父さんが話す場面③お父さんが戦争へ行く場面④十年後の場面、である。なお本文は『今西祐之全集4』(1987、偕成社)のものに拠る。

① 「一つだけちょうだい」とゆみ子がいい、それにお母さんが答える場面

「一つだけちょうだい。」

これが、ゆみ子のはっきりおぼえた、最初のことばでした。⁵³⁾

「一つの花」はゆみ子の言葉から物語が始まる。その後、「戦争のはげしかったころ」はどのようなことが起こり、何を食べていたのかについての語りがなされる。お腹をすかしていたゆみ子には、お母さんにごはんやおやつを求めると、お母さんは、「じゃあね、一つだけよ。⁵⁴⁾」と言っ

⁵⁰⁾ 桐書房(1988)

⁵¹⁾ 大沢(2016)

⁵²⁾ 関口(2004)においても、上記と同じ四つの構成であるとしている。P.116~p.117

⁵³⁾ 『今西祐之全集4』(1987)p.10

⁵⁴⁾ 同上

て、ゆみ子に一つ分け与える。そのうち「一つだけ」が口癖となり、それがゆみ子にもうつってしまうのである。この場面だけを読むと、お母さんとゆみ子の二人しか登場せず、お父さんの言動や職業については一切書かれていない。その後の場面を読めば、お父さんが存在していることは確かであり、共に食卓を囲んでいる可能性が高い。それにも関わらず、お父さんはゆみ子に対して何もせず、お母さんが「一つだけ」と言って食べ物を分け与える。戦後、家父長制度は廃止されたが、その思想が無意識に残り、それが「食べ物は母親が分け与えるもの」としてこの場面に反映されたのではないかと、とも考えることができる。しかし、④で再び母と娘のみの場面が描かれることを踏まえると、この場面における父親の不在は、「お母さん」がゆみ子に食べ物を分け与えるという母から娘への愛情や情けの部分を強調するために必要であったと考えられる。

② ゆみ子に対して、お母さんとお父さんが話す場面

場面①でのゆみ子の様子を見て、お母さんとお父さんが彼女の将来を憂う場面である。お母さんは「かわいそうな子」とゆみ子を称する。それに対して、お父さんが、

「この子は、一生、みんなちょうだい、山ほどちょうだいといって、両手をだすことを知らずにすごすかもしれないね。(中略)みんな一つだけ。一つだけのよろこびさ。いや、よろこびなんて、一つだってもらえないかもしれないんだね。いったい、大きくなって、どんな子にそだつだろう⁵⁵。」(下線は筆者による)

とため息とともに話す。そして、ゆみ子を「めちゃくちゃにたかいたかい⁵⁶」するのである。ここでは、「めちゃくちゃに」つまり、際限なく、たかいたかいをすることによって、ゆみ子を「一つだけ」の苦しみから解放しようとするお父さんの姿が描かれる。場面①において、お母さんのみを登場させることによって、この場面でのお父さんの行動が強調されるのである。また、すぐにたかいたかいするということは、ゆみ子は二人のそばにということになるが、彼らの会話に対する反応については書かれていない。そこには、幼さによるゆみ子の純粋さが潜んでいると考えられる。そして、この場面では下線部のお父さんの言葉が今後の場面の伏線となっていることがわかる。

③ お父さんが戦争へ行く場面

この場面は、「一つの花」において最も象徴的な場面であるといえる。体の丈夫でなかったお父さんが戦争に行かなければならなくなったということは、戦争自体が既に佳境を迎えていることを示唆している。お父さんを見送りに駅へ向かう際、お母さんのかばんにはおにぎりが入っていたが、「おじぎり、一つだけちょうだい⁵⁷」とせがむゆみ子にすべて与えてしまう。その場面において語り手は、

お母さんは、戦争に行くお父さんに、ゆみ子のなき顔を見せたくなかったのでしょうか。⁵⁸

⁵⁵ 同上 p.11

⁵⁶ 同上

⁵⁷ 同上 p.12

⁵⁸ 同上

と語っている。もう二度とゆみ子と父親が会うことはないとお母さんの心情、そして戦争によって夫を失ってしまうかもしれないという覚悟、あるいはあきらめが見て取れる場面である。三人は駅につき、汽車が来る時間まで待つ。そのとき、お父さんは、ゆみ子とお母さんのほかに見送りはないのである。出征の際、多くの人に見送られて戦地へと赴くのが一般的であったが、ゆみ子の家族は前述したように、祖父母や親戚、兄弟もおらず、隣人や知り合い、近所の人を見送りのない。他の男がすでに戦地へと赴いていることも考えられるだろうが、ここでは、ゆみ子たち三人家族の存在をより強調し、あくまでその三人にのみ焦点をあてて描くために用いられた記述であると考えられる。しかし、汽車が入る直前になって、ゆみ子は「一つだけちょうだい」と、ぐずり始める。お母さんは必死にあやすものの、お父さんはぷいとどこかへ行ってしまふ。そして帰ってきたお父さんの手には「一りんのコスモス」が握られていたのである。そのコスモスが咲いていたのは、「プラットホームのはしっぽの、ごみすて場のようなところ」である。それは、プラットホームの端で汽車を待っていたゆみ子たちの姿とも重なる。

「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。一つだけのお花、だいじにするんだよう……」⁵⁹

お父さんはそう言って、ゆみ子にコスモスを渡すと、ゆみ子は足をばたつかせて喜ぶ。ゆみ子を笑顔にさせる存在としてコスモスを登場させることによって、コスモスが希望を象徴させる、笑顔をもたらす存在とし、それに重ねられた家族の存在も、同様の意味を含んでいることを示している。笑顔のゆみ子を見てお父さんにもっこりとわらい、何も言わずに出発してしまう。コスモスの花を渡す場面において、今度はお母さんが描かれなくなってしまう。③のクライマックスとも呼べる場面において、お父さんとゆみ子だけを登場させることで、父親として娘の幸せを願う気持ちがコスモスを使って象徴的に描かれるのである。そして、出発の際、ゆみ子ではなく、「ゆみ子のにぎっている一つの花」を見つめて旅立ってしまう。そのまなざしにも、もう二度と会えない可能性を意識しながら、そのコスモスに想いを託そうとするお父さんの姿勢が表れていると考えられる。

④ 十年後の場面

お父さんが戦争へ行行ったあと、十年後のゆみ子たちが描かれる。十年後とあるので、戦争は既に終結していることがわかる。その最初の文の次に、

ゆみ子はお父さんの顔を覚えていません。自分にお父さんがあったことも、あるいは知らないかもしれません。⁶⁰

と書かれ、ここでゆみ子のお父さんが亡くなってしまったことが明かされる。おそらくゆみ子はお母さんと二人だけ、つまり母子家庭のなかで成長したのだろう。その過程は一切描かれていない。そして、ゆみ子はお父さんの存在すら認識していないのである。しかし、ゆみ子の家は、かつてお父さんが託した想いの象徴であるコスモスに包まれていることで、ゆみ子がささやかながらも幸せな生活を送っていることが示唆されている。そして、ミシンの音の描写によって、お母さんの存在も描かれる。しかし、この文におけるお母さんはあくまで語り手の推測にとどまり、この場面

⁵⁹ 同上 p.13

⁶⁰ 同上 p.15

はゆみ子の十年後に焦点が当てられていることが伺える。ゆみ子はお母さんにおにくとおさかなのどちらがいいかを聞き、その後

買い物かごをさげたゆみ子が、スキップをしながら、コスモスのトンネルをくぐってでできました。そして、町の方へ行きました。⁶¹

とゆみ子の浮足立った様子が描かれる。ゆみ子はこの場面で、父親の存在、そして戦争の過去を聞かされず、あくまで幸せに、純粋な様子を見せる。場面②において「どんな子に育つだろう」といったお父さんの問いに対して、場面③においてお父さんがコスモスに託した想いの通りに具現化して答えているのである。お父さんについては、二文目の一文にとどまり、ゆみ子たちの家にお父さんは存在しない。これは、場面①との対比であると考えられ、幼子ゆえの純粋さを持っていたゆみ子は、無知ゆえの純粋さを持ったまま父親の存在を気にかけることなく生きているのである。

ここまで4つの場面に分けてテキストを引用しながら、そこに描かれる家族についての分析を行った。今西は三人称視点によって、起こったことを淡々と述べていること、心情に言及せず、行動のみを描くことで、読み手はお父さん、お母さん、ゆみ子それぞれの心情を理解しようとする。自由な読みが可能となる分、読み手は自分の環境を投影しやすくなる。場面①における父親の不在は、場面②における親の子どもへの憂い、場面③における父親の娘への願いを強調し、場面④の再びの不在によって、その願いの成就と、父親が亡くなったことに対する衝撃が、強く印象に残るのである。2.3において、戦争児童文学における家族についての「別れ」に注目して分類を行った。

「一つの花」は、「家族の死」という別れを描いている物語である。それにもかかわらず、他の作品とは異なり、その虚しさや苦しみ、辛さの中で死んでいった家族を想いながら生きていくという描写は描かれることはない。戦争から十年後の幸せにあふれたゆみ子の姿なのである。そのような点で、「一つの花」におけるゆみ子たち家族の描き方は特異的であると言える。

3.3 国語教科書における「一つの花」について

3.3.1 国語教科書における「一つの花」採用の変遷

2.2において、国語教科書に採用された戦争児童文学についての変遷を追ったが、ここにおいては、「一つの花」に注目し、その採用の変遷を追うこととする。2.2では分析に用いた教科書は現行まで調査が可能であった東京書籍、教育出版、学校図書、光村図書の四社としたが、挿絵分析には、日本書籍の教科書も主要教科書の一つとして検討対象とする。

3.1.1において触れた通り、「一つの花」が国語教科書に初めて採用されたのは、昭和49年度版の日本書籍(以下、日とする)の四年生の教科書においてである。その3年後の昭和52年度版では、日に加え、教育出版(以下、教とする)、光村図書(以下、光とする)も四年生の教科書に採用している。しかし、昭和55年度版になると、日は採用をやめ、教、光の二社のみの採用となるが、昭和58年度版において日は再び採用する。昭和61年度版も同様に三社の採用であったが、平成元年度、東京書籍(以下、東とする)が四年生の教科書に掲載することとなる。平成元年には主要教科書会社5社のうち、4社が採用している⁶²。「一つの花」の採用の増加数は、戦争児童文学全体

⁶¹ 同上

⁶² 同年、大阪書籍も「一つの花」を採用している。唯一採用していない学校図書は「すいかの種」を

の採用数と同様であり、自民党による「一つの花」への攻撃の後、その有用性が児童文学者の共通認識となったのだろう。また、今西の抑制された文章と、象徴的に描かれた家族像が、小学四年生への読み物として適当であると捉えられたとも考えられる。メタ的な思考で考えるとすれば、あまりにも「定番教材化」してしまった故、採用を急に取りやめることが困難であったという見方もある。平成元年においても同様であり、その年は『今西祐行全集』が出版された年であるため、文学的にも、教材としても今西祐行が注目されていたことが伺える。4社の採用は、三度の改定を経た平成12年度まで続き、平成14年度において、東、日が採用を取りやめる⁶³。残った教、光は、平成31年度(現行)のまで、採用を続けている⁶⁴。東は、主教材としての採用は取りやめたものの、付録「読書の部屋」での採用を続け、平成31年度(現行)にて再び主教材として採用している。日本書籍はその後の採用はなかったものの、これまで採用を行っていなかった学校図書(以下、学とする)が、平成27年度より、「しりょうへん」の付録にて採用し、平成31年度(現行)も同様に採用している。2.2でも触れたように、平成14年度版以降採用数が減少していることに対しては、十五年戦争の記憶の風化という理由も考えられるが、「一つの花」において無視されてきた日本の戦争による加害者としての側面や、平成になっても続く海外での戦争を主題としたほうが、教材として適切であると考えられたためだろう。しかし、現在、付録や資料であるにしても、教科書に採用され続ける「一つの花」は、教材として多様な可能性を含んでいるといっても過言ではない。

3.3.2 国語教科書における「一つの花」の挿絵の変遷

ここでは、「一つの花」が掲載された教科書の挿絵に注目し、教科書会社ごとにその変遷を追い、考察する。3.2で分析したような家族の描き方にも言及を行う。挿絵についての調査は、教科書図書館にて行った。誤記を避けるため、この節においては、和暦及び検定年度で統一する。挿絵に用いられやすい場面を、①ゆみ子がお母さんに「一つだけ」とせがむ場面②お父さんがゆみ子に「たかいたかい」する場面③駅で車を待つ場面④お父さんがコスモスを探す場面⑤お父さんがゆみ子にコスモスを渡す/渡した場面⑥ゆみ子が家から買い物に行く場面⑦その他に分け、その詳細な描写について言及する。なお、挿絵画像は著作権保護のため掲載しない。

① 東京書籍

東京書籍は、平成元年度「新しい国語 4上」において、「一つの花」を初めて採用した。挿絵画家は不明であり⁶⁵、挿絵は三枚である。まず、②の場面が描かれる。鉛筆画のようなタッチで黒と赤と白の三色使った縦長の絵で、中央に「たかいたかい」をするお父さん、上部にゆみ子、そして奥にお母さん、その後ろには障子が描かれている。この場面において、「たかいたかい」されているゆみ子は笑顔であり、それを見つめるお母さんの表情も穏やかである。お父さんの顔はゆみ子の方を向いているためその表情は描かれていない。この場面において、障子から部屋にそそぐ光が、集中線のような役割を果たし、抱き上げられるゆみ子の姿を強調している。二枚目は⑤の場面である。一枚目と同様に、黒と白と赤の三色であり、赤はゆみ子の服とほぼ、父親に使われてい

採用していた。

⁶³ 東は「世界で一番美しいぼくの村」、日は「チイ兄ちゃん」に変更している。

⁶⁴ 光が採用を続けた理由は不明だが、教は平成8年度版から今西が亡くなる平成12年度版のものまで、今西自身が教科書の監修を行っていたことから、採用が続けられたと考えられる。

⁶⁵ 奥付に教科書の挿絵作家全員の名前が書かれており、「池田源英、久米宏一、小泉るみ子、小関ひさ子、高峰至、滝原愛治、徳田秀雄、永田萌、藤城清治、松野伸彦」の内の一人であると考えられる。

る。ゆみ子に渡す瞬間のコスモスを中心に置き、遠くに汽車に向かって手を振る人々を描くことで、ゆみ子たちがそこから遠く離れた場所にいることを示唆している。手前にゆみ子たちを描き、画面右にゆみ子(手前)を抱いた母親、左にゆみ子の手を握る父親を配置している。ゆみ子はコスモスに視線を注ぎ、母親も目を閉じて笑っているのとは対照的に、父親の顔は黒く影が付けられており、その顔は笑っているようにも、無表情のようにも見える。戦地に赴き死んでしまう可能性のあるお父さんと、家に残り生きていくお母さん、ゆみ子ちゃんとの対比が描かれていると考えられる。三枚目は、⑥の場面である。②⑤が黒白赤の三色しか用いられていなかったのに対して、この場面ではフルカラーで描かれている。それによって、「戦争が終わった平和な世界」を象徴的に表しているのだろう。コスモスが咲き乱れる道の真ん中を、おさげ髪で黄色のリボンをし、オレンジ色のワンピースを着たゆみ子が満面の笑みでスキップをしている様子が描かれる。寒色系の色を緑色以外使わず、暖色系の色を使い、また画面右上から差し込む光を効果的に使うことで、その場面の明るさ、ゆみ子の幸せな気持ちを表現していると考えられる。平成4年度は変更がないが、平成8年度版において、緒方直青の挿絵に変更となる。挿絵は五枚に増え順に⑦、①、②、⑤、⑥である。画家が変更になったことで絵柄も大幅に変わったがここからは、その中でも特異な点について言及する。まず、⑦である。これは、戦争で「つぎつぎに焼かれて、灰になってい⁶⁶」った町が見開き二ページにわたって描かれている。空は夕焼けのような赤色であり、倒れた電柱や壊れた建物は黒色で書かれている。お父さんが生きていた当時、町がどの様なものだったのか、戦争が何をもたらしたのか、生徒はこの絵を見て瞬時に理解するのである。次に、①の挿絵は、ゆみ子が一人で、右手の人差し指で一をの形を作っている様子が描かれている。ゆみ子は笑っておらず、当時のひもじい状況を想起させる。前版と同じく描かれている②の場面では、「たかいたかい」するお父さんとゆみ子が、①と対照的に、二人とも笑顔で描かれている。お母さんは、そこに描かれていない。⑤の場面ではお父さんはコスモスをゆみ子に渡し終えたあとであり、既に電車に乗ってしまっている。お父さんは遠く描かれおり、またかぶった帽子によって、またゆみ子とお母さんはお父さんを見ているために、登場人物の誰の表情も読み取ることができない。お父さんとゆみ子、お母さんの距離は遠く空いており、それはそのまま、その後の場面の心理的な距離にもつながっていると考えられる。⑥の場面では、これも前版と同じように、それまでオレンジと黒を基調として描かれていたのが、コスモスのピンクや茎の緑、そしてゆみ子は水色のワンピースを着ており、画面に彩りが見られるようになる。平成12年度版になると、南塚直子の挿絵に変更される。ゆみ子が終始暖色系の服を着ていたり、三色以上使われていたり、最後の場面を強調する工夫は見られない。挿絵は五枚であり、順に⑦、①、②、⑤、⑥と挿絵に用いられている場面は同じである。①では、ゆみ子とお母さんが描かれ、お父さんが存在せず、文章に忠実に描かれている。②では、ゆみ子、お父さんともに、少し口角を上げたさりげない笑みとなっている。その後しばらく「一つの花」の採用はなく平成22年度版にて、資料「読書の部屋」にて採用されるが、挿絵は平成12年度版のものと同様である。そして、平成26年度版の「読書の部屋」にて挿絵が伊勢英子に変更される。破壊された町の描写はなくなり、①、②、④、⑤、⑥の五枚が使用されている。全体的に明るい色で描かれており、暖かい雰囲気を感じさせる。南塚と同様に、①ではお母さんとゆみ子のみを描いているが、②では、満面の笑みを浮かべるゆみ子、その後ろで手を合わせてほころぶお母さんが描かれている。この挿絵だけを見れば、戦争中だとは思えないほどの暖かさである。そのために、その後の④⑤の場面が際立つようになっている。④の場面は26年度において初めて描かれ、視点が

⁶⁶ 今西(1989)p.10

駅の真ん中からであることから、駅の場面であるにもかかわらず、他の人々は描かれていない。**④****⑤**のどちらにおいても、ゆみ子たち三人の姿が描かれるが顔を読者からそむけてしまっているため、その表情を読み取ることはできなくなっている。そして、**⑥**は構図としては、平成元年度版と類似している。平成31年度(現行)においては、**⑤**の場面のみが、ゆみ子とコスモスのアップへと変わり、よりコスモスが象徴的に描かれるようになっていくことが分かる。

② 教育出版

教育出版では、昭和52年度の「新版国語4下」にて採用されることになった。挿絵画家は不明⁶⁷である。**①**、**③**、**④**、**⑥**の四枚の挿絵が使われている。**①**では、東京書籍とは異なり、ごはんの場面ではなく、お母さんが裁縫をしている場面が描かれている。中央にお母さんの服の裾を掴み、人差し指を立てるゆみ子、画面左に裁縫するお母さん、そして、画面右には、新聞を読みながらその様子を眺めるお父さんが描かれる。お母さんとゆみ子をお父さんが後ろから眺めるという位置関係にすることで、前述の場面**①**における父親の不在でも違和感のない挿絵となっている。**③**では、日の丸や名前の書かれた旗の間をお父さんが歩き、その左側に、ゆみ子を背負い頭を下げたお母さんの姿が描かれる。**③**は東京書籍では見られなかった場面であり、本文において日の丸の旗の言及がないにもかかわらずこの場面が取り上げられている。戦争児童文学の重要性が表立って叫ばれるようになった時代であったため、**②**ではなく、**③**の場面を採用したことによって、戦争へ向かう恐ろしさ、緊張感を表出させたのではないだろうか。**④**では、旗を掲げる人々が遠くに描かれ、その手前でお父さんのみがコスモスに手を伸ばそうとしている様子が描かれる。画面は寒色系の色が多く使われる中、コスモスの花のみがピンク色で描かれ、強調される。ゆみ子やお母さんを描かないことで、お父さんのみに焦点をあて、その心情を読み取らせる意図があると考えられる。昭和55年度版以降、平成17年度まで一貫して中尾彰の絵が使用されている。しかし、その中でも細かい変化が見られる。昭和55年度版では**①**、**③**、**⑤**が採用され、前版と異なり、**①**ではゆみ子とお母さんとお父さんが丸いちゃぶ台を囲んでいる様子が描かれる。ゆみ子がお母さんにねだり、それをお父さんが眺めているという構図である。色は使われず、ゆみ子のピンク色の服が強調される。**③**では、画面左側にコスモスに手を伸ばすお父さんが描かれ、右側に見送りの人々が描かれるが、その中央に、ピンクの服を来たゆみ子がお母さんに背負われている姿も見える。**⑥**では、コスモスの花に囲まれスキップをするゆみ子が描かれる。ゆみ子は、白のシャツに黒のサスペンダー付きのスカートを履いて、右手に鞆を持っている。中尾の作風によるものだと考えられるが、登場人物のどの表情も笑顔には描かれていない。昭和55年度版に変更はないが、昭和61年度版では全体的な色味に変更されている。兵士元年度版では、**⑥**において、若干の変更が加えられている。構図に大きな変化はないものの、色味が抑えられ、ゆみ子の左腕と左足の角度が調節されている⁶⁸。この変化についての理由は見当をつけることができなかったが改訂によって、画家自身が微調整を望んだのではないかと考えられる。昭和61年、平成元年における変更については大きな理由はないと考えられる。平成4年度版においては、画家および採用場面に変更はないが、全面的に描き直しが行われている。挿絵すべてに色が付き、印象の強さが増すようになり、**③**では人々の人数が減ること、また、色が加えられることにより、ゆみ子たちの存在が分かりやすくなったと同時に、コスモスの印象が弱くなってしまっている。そして**⑥**の場面では、ゆみ子の着ているスカートが黒色か

⁶⁷ 桜井誠、沢井一三郎、鈴木登良次、滝平二郎、深沢紅子、藤沢友一、山田史郎のうちの一人であると考えられる。

⁶⁸ 左腕の向きが上がり、左足の向きは下がっている。

ら、赤青ピンクのチェック模様に変化し、より華やかになっている。全面的に色が足されたことにより、他の挿絵と同じような明るさになってしまうことを避けるため、⑥の場面の「幸せ」の表現を強調するためにゆみ子の服のデザインを変更したのではないかと考えられる。それ以降 23 年度版まで、レイアウトに若干の変更はあるものの、挿絵に変化はなかったが、平成 27 年度版、平成 31 年度版(現行)において岡田千晶に変更された。①、②、③、⑤、⑥の挿絵が使用されている。①は前版と位置が変更になっている以外は、構図に変化はない。しかし、全体的に色が抑えられていることが分かる。②は、前版まで教育出版における挿絵として使用されなかった場面である。お父さんに「たかいたかい」されるゆみ子が描かれ、ゆみ子は満面の笑みである。お母さんは描かれていない。③では、奥に万歳と叫ぶ人々を描き、手前にゆみ子を抱くお父さんとお母さんを描く。ゆみ子の赤い防空頭巾と、お母さんの青い上着、そして画面左下に咲くコスモスの花以外は色が抑えられており、全体に暗い印象を与えている。⑤ではお父さんがゆみ子にコスモスを差し出し、ゆみ子がそれを受取ろうとする場面が描かれる。三人の顔は朗らかで、あたたかい場面として描かれている。⑥は家が描かれていないものの同様の構図で描かれている。

③ 学校図書

平成 27 年度版、平成 31 年度版において、「しりょうへん」の作品として採用されている。挿絵は川上和生である。全体的に淡い色が使われており、輪郭が丸く、朗らかな印象を与える。①、②、⑤、⑥の場面が挿絵として描かれており、登場人物のどの顔も口角が上がっている。①では、お母さんとゆみ子のみが描かれ、お父さんは存在していない。②では、お父さんとゆみ子のみが描かれ、お母さんは存在していない。⑤では、画面右側でお父さんが、ゆみ子に対してコスモスを渡し、ゆみ子はそれに手を伸ばしている。笑ってはいるものの②表情に比べてお父さんの表情は硬く、その細かい変化によって心情を描き出している。画面左側では、出征する他の男に激励する人々が描かれている。⑥は、構図自体は他の版と類似しているが、ゆみ子がやや遠くに描かれ、手前に大きくコスモスが描かれている。でかけるゆみ子よりも、咲き乱れる「幸せ」の象徴であるコスモスを印象付けるためであると考えられる。

④ 光村図書

光村図書は、昭和 52 年度版「小学 新国語 四年＝下」において初めて採用された。挿絵は、市川禎男である。①、⑤、⑥の三枚が挿絵として採用されている。①では、お母さんとゆみ子のみが描かれている。⑤では、画面右側でお父さんが、ゆみ子に対してコスモスを渡し、ゆみ子はそれに手を伸ばしている。他に人は描かれず、ゆみ子たち三人のみが描かれる。どの三人も笑顔で描かれている。⑥では、他の版が左側に向かっていくのに対して、ゆみ子は右側へと向かっていく。白いシャツの上に水色のトレーナーを着、赤いスカートを履いている。昭和 55 年、58 年度版では、二枚目のみ白黒に変更されている以外の変化はない⁶⁹。昭和 61 年度版では、挿絵が司修に変更されている。③、⑤、⑥の三枚が挿絵として使用されている。①②が使用されず、③から描かれることはこの年度が初めてであり、③では、駅へ向かうお父さんとお母さん、そして、お母さんにおぶわれた、水色の防空頭巾をつけたゆみ子が描かれている。⑤では、ゆみ子たち三人のみを描き、真ん中にコスモスの花が来るよう、画面右に花を持つゆみ子とお母さん、画面左にお父さんを描いている。コスモスの花は、ピンクではなく白色で描かれ、お父さんは、全体を茶色で、肌もオレンジ色で塗られ、おおよそ人間らしくない色合いをしている。③の場面におけるお父さんの肌は、⑤よりも肌色に近いので、戦争に行くお父さん、戦地で死んでしまうお父さんの姿を暗示していると考え

⁶⁹ 印刷費削減のためか。

えられる。そして、⑥は、青色を背景に、ピンクと白色のコスモスがちりばめられている中で、左向きにスキップをするゆみ子が描かれている。茎や葉の色が目立たない代わりに、赤の上着と緑のスカートを身に着けている。写実的なコスモス畑ではなく、幻想的に描くことで、この物語のフィクション性をより強く表現することが可能となっている。平成元年度版は変更なく、平成四年度版において、石倉欣二の挿絵に変更している。①、②、③、⑤、⑥の場面が採用されている。①は、お母さんとゆみ子のみが描かれている。背景は黄色に塗られ、二人とも笑顔で、暖かい場面として描かれていることが分かる。②では、お父さんとゆみ子のみが描かれている。ゆみ子の背景は青、お父さんの背景はオレンジに塗られ、二人とも笑顔で描かれている。しかし、③では、背景は黄緑と暗い緑が混ぜられたような色に塗られ、画面左のお父さんの顔や首、体まで及んでいる。お父さんに表情はなく、そのお父さんに向かって、画面右のお母さんは頭を下げている。ここまで取り上げた挿絵の中で唯一、戦争に向かうことに対してあからさまとも言えるほどの表現をしている挿絵である。そんな二人とは対照的に、お母さんにおぶわれたゆみ子は笑顔を見せている。戦争を理解できない幼子の純粋さと哀れみを表出させている。⑤では、背景が深い緑色と黄色に塗られ、画面左でゆみ子にコスモスを渡しているお父さんの表情は読み取ることができない。お母さんは口に笑みを浮かべながらも、どこか困ったような表情をしており、悲しみを表現していることが分かる。そして、ゆみ子は最後まで、笑顔で描かれている。⑥では、青空ととんとんぶきの屋根の家を背景に、背の高く書かれたコスモスの前で、ゆみ子はスキップすることなく、読者に視線を向けている。目を閉じ笑顔のままだったゆみ子が、目を開け自分の足で立ち、微笑んでいる。平和な世の中になったことを表現すると同時に、ゆみ子の成長も表している一枚と言える。しかし、次の平成8年度版において、松永禎郎に変更となる。①、②、③、⑤、⑥が挿絵に使用されている。全体的に輪郭がぼやけた淡い色で描かれ、背景まで綿密に書き込まれている。①では、お母さんとゆみ子のみが描かれ、②では、ゆみ子をたかいたかいするお父さんと、それを見上げるお母さんが描かれている。③では、画面右側にゆみ子たち三人を、画面左側に駅と見送りの人々を小さく描き、彼らの距離の差を表現している。⑤では、ゆみ子たち三人のみを描き、画面左にコスモスを差し出す父親、真ん中に手を伸ばすゆみ子、そしてそれを抱くお母さんが描かれている。三人とも、穏やかではあるものの、笑っているとは断言できない表情をしている。そして、⑥はコスモス畑に囲まれスキップするゆみ子が描かれている。

ここまで、主要四会社の挿絵の変遷を追ってきた。挿絵は改訂のタイミングではそのまま使用されることが多いが、新版の編集の際に変更されたり、一新されている。新たに編集する際に、教材の意図に合わせ、挿絵を変更していると言える。四会社の変遷を追って分かったことをまとめる。①は、父親が描かれていない、もしくはお母さんやゆみ子と葉少し離れたところから描かれている、の二つのパターンに分けることができ、ほとんどの会社のほとんどの年度によって描かれている。②は、教育出版や光村図書などを見ると、古い時代の物には見られないが、時代が下るにつれて使われるようになっていくことが分かる。年月を経るについて、お父さんがゆみ子を「たかいたかい」することにこめられた意味や心情について注目が深まったからではないかと考えられる。③は教育出版、光村図書にのみに描かれ、特に光村図書の61年度版における司修の挿絵は特異的である。④は初期の教育出版にのみ描かれている。コスモスを探すお父さんのみを描くことや場面は、他の教科書会社において重要視されていなかったことが伺える。⑤は、タイトルにつながるクライマックスのシーンであるからこそ、そのためすべての教科書において描かれている。後ろに見送りの人がいるときといないときがあるが、そのほとんどは、ゆみ子たち三人にクローズアップさ

れ、家族としての最後の営みを生徒に印象付けるために、また、タイトルの意味について考えさせるために、使用されている。そして、⑥も多くの教科書において採用されている。コスモス畑を鮮やかな服装で左向きにスキップしていくゆみ子の姿は、どの画家においても共通しており、「平和」とゆみ子の「幸せ」を象徴づけている。お父さんの死が語られる場面において、どの教科書の挿絵のゆみ子も笑顔である。それは、ゆみ子が戦争の記憶、父親の記憶を持たないからこそ生み出されるものであり、画面が明るく華やかに、ゆみ子が笑顔になる程に、その残酷さが、虚しさも浮き彫りになると考えられる。その中でも、光村図書の平成四年度版における石倉欣二の挿絵は、他の挿絵に比べて特異的であった。

4 おわりに

本稿では、戦争児童文学と家族をテーマに、小学校の国語教科書に採用された戦争児童文学において、どのように家族が描かれたのか、特に今西祐行「一つの花」に注目し、その挿絵を視座としながら読解を試みた。その過程において、戦争児童文学の研究史や「一つの花」の先行研究、小学校の国語教科書に採用された戦争児童文学の史的概観について、書籍の購入や教科書図書館での調査をもとに整理、検討を行った。今回の調査において、教科書に採用される戦争児童文学の傾向が大幅に変化していることがわかった。また、国語教科書に採用されている戦争児童文学は、その多くが家族との不可抗力な別れを描き、その苦しみ、虚しさを訴えている。しかしその点において、「一つの花」は家族の描き方という部分に焦点を当てることによってその特異性が表出した。また、各教科書会社による挿絵を比較することによって、その会社における「一つの花」が表現しなかった部分、訴えなかった部分がそれぞれ現れることとなった。本稿の課題として大きく上げられるものとしては、あくまで家族の描き方のみに注目し、家族を社会的に捉えている研究に当たれなかったこと、また、挿絵の比較もあくまでその比較や検討にとどまり、指導書等を補助線に考察を深めきれなかったことが挙げられる。

最後に、本論文の執筆にあたり、多くの方々にご支援いただきました。

アドバイザー教員である橋本順光教授、教務補佐の Escande Jessy 様には、多くの助言と支援をいただきました、心から感謝申し上げます。

5 参考文献

- [1] 大阪国際児童文学館(1993)『日本児童文学大事典 第二巻』,大日本図書株式会社
- [2] 石上正夫,時田功編(1980)『戦争を知らない子どもたちへー戦争児童文学 350 選』,あゆみ出版
- [3] 奥野健男(1973)『無頼と異端』,国文社
- [4] 日本児童文学者協会編(1964)『日本児童文学』10(8)(93),日本児童文学者協会,盛光社,小峰書店
- [5] 佐藤郁(1966)「戦争児童文学を子どもにあたえて」『日本文学』15 卷 11 号 p.57~p.64
- [6] 三枝康高(1966)「戦争児童文学の可能性—戦争体験をどう伝えるか—」『日本文学』15 卷 11 号 p.49~p.56
- [7] 日本児童文学者協会編(1970)『日本児童文学』16(9),日本児童文学者協会,盛光社,小峰書店
- [8] 向川幹雄(1995)『教科書と児童文学』,高文堂出版
- [9] 福田将太(2005)『対比の構造に着目して戦争文学を読む:戦争文学教材の史的概観と新しい学習指導について』,信州大学国語教育学会,「信大国語教育」,15 卷,p.53~p.66
- [10] 日本児童文学者協会編(1981)『国語教科書攻撃と児童文学』,青木書店

- [11] 渋谷清視(1983)『平和を考える戦争児童文学●子どもに何をどう読ませるか』,一光社
- [12]大槻和夫(1983)「状況認識の力を：平和教育の視点から」『日本文学』32巻,10号,p.72~p.73
- [13]長谷川潮(1995)『「戦争と平和」子ども文学館』日本図書センター
- [14]長谷川潮(1995)『日本の戦争児童文学 戦前・戦中・戦後』日本児童文化史叢書1
- [15]鳥越信・長谷川潮編(2012)『はじめて学ぶ 日本の戦争児童文学史』ミネルヴァ書房
- [16]関口安義(2004)『一つの花 評伝今西祐行』教育出版株式会社
- [17]三井喜美子(1979)「一つの花」の初出と異本の考察『日本文学』28巻,10号,p.73~83
- [18]三井喜美子(1989)「奇蹟の花—願いの文学「一つの花」論」『今西祐行研究 今西祐行全集別巻』偕成社 p.91~p.108
- [19]今西祐行(1989)「「一つの花」のこと」『冬の祭り 今西祐行全集 15巻』偕成社 p.84~p.86
- [20]鈴木敏子(1980)「「一つの花」と「一つのおにぎり」は等価か：「一つの花」抒情批判(子午線)」『日本文学』29巻,2号,p.50~p.51
- [21]森本真幸(2002)「"一つの花"というファンタジー：「戦争ハイヤダ」と言えなかったお話(<特集><歴史認識>と<文学>)」『日本文学』51巻,1号,p.61~p.70
- [22]大沢貴代美(2016)「小学校における家族像：国語科と他教科の比較から」『日本語と日本文学』p.23~p.32
- [23]小林一仁(1992)「学習材「一つの花」の読み方：構文理解から鑑賞へ」『茨城大学教育実践研究』11巻,p.39~p.53
- [24]渥見秀夫(2002)「「一つの花の」教材論的研究」『愛媛大学教育学部紀要.第Ⅱ部,人文・社会科学』34,(2)
- [25]三好修一郎(2009)「「一つの花」の読みと教材性」『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』116巻 p.66~p.69
- [26]小出真規(2016)「読み方を自覚する国語科の授業づくり——今西祐行「一つの花」(光村・四年上)の実践を通して——」『岡山大学国語研究』,30巻,p.30~p.40
- [27]岩崎直哉(2019)「物語のプロットを捉え一貫性を形成する過程の研究—「一つの花」最後の一文の語りに着目して—」『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』137巻、p.287~p.290
- [28]大越和孝・西田拓郎編(2011)「教材別・単元展開の可能性に挑戦する3 「一つの花」の授業」東洋館出版社
- [29]辻恵子(2016)「文芸研の授業シリーズ 一つの花」新読書社

※今回教科書図書館にて調査・参照した国語教科書は、昭和49年度から平成31年度までの東京書籍、教育出版、学校図書、光村図書の全学年の国語教科書及び昭和49年度から平成14年までの日本書籍の四年生の国語教科書、平成4年から8年度までの大阪書籍の四年生の国語教科書、平成23年度から平成26年度の三省堂の四年生の国語教科書である。各教科書における、「一つの花」が掲載されている頁については、添付している6、資料3「「一つの花」採用教科書リスト」に記載している。

6 資料

1, 戦後の国語教科書に採用された戦争児童文学(平成17年度以降)

教科書における戦争児童文学表まとめ(平成17年度以降)

平成17年度	東京書籍	教育出版	学校図書	光村図書
--------	------	------	------	------

1 年				
2 年				
3 年				ちいちゃんのかげおくり
4 年	世界一美しいぼくの村 一つの花(付録)	一つの花		一つの花
5 年			父ちゃんの凧	
6 年	ヒロシマのうた	川とノリオ	ロシアパン	(平和のとりでを築く)

平成 23 年度	東京書籍	教育出版	学校図書	光村図書
1 年				
2 年				
3 年				ちいちゃんのかげおくり
4 年	一つの花(付録) 世界一美しいぼくの村	一つの花		一つの花
5 年	いわたくんちのおばあちゃん		父ちゃんの凧	
6 年	ヒロシマのうた	川とノリオ	ロシアパン 「ヒロシマの傷(詩)」	(「平和について考える」)

平成 27 年度	東京書籍	教育出版	学校図書	光村図書
1 年				
2 年				
3 年				ちいちゃんのかげおくり
4 年	一つの花(付録) 世界一美しいぼくの村 世界一美しい村へ帰る(付録)	一つの花	一つの花(資料編)	一つの花
5 年			父ちゃんの凧	
6 年	ヒロシマの歌	川とノリオ	川とノリオ 「ヒロシマの傷(詩)」 「フリードルと	「未来がよりよくあるために(説明的文章)」

			テレジンの画家 たち(説明的文 章)」	
平成 31 年度	東京書籍	教育出版	学校図書	光村図書
1 年				
2 年				
3 年				ちいちゃんのか げおくり
4 年	一つの花 世界一美しいぼ くの村 世界一美しい村 へ帰る(付録)	一つの花	一つの花(資料 編)	一つの花
5 年			ゆうきの花がひ らくときーやな せたかしとアン パンマンー	たずねびと
6 年	ヒロシマのうた (付録)	川とノリオ	川とノリオ 「フリードルと テレジンの小さ な画家たち(説 明的文章)」 「ヒロシマの傷 (詩)」	「平和のとりで を築く」(付録)

2. 戦後の国語教科書に採用された戦争児童文学リスト

【戦争児童文学歴代採用作品】

『最後の授業』神宮輝夫(訳) 松田穰(訳)

『春先のひょう』杉みき子

『かわいそうなぞう』土屋由岐雄

『救命艇の少年』石川光男

『一つの花』今西祐行

『村一番のさくらの木』来栖良夫

『パパのナイフ』西郷竹彦(訳)

『お母さんの木』大川悦生

『石うすの歌』壺井栄

『ヒロシマのうた』今西祐行

『チロヌップのきつね』高橋宏幸

『母さんの歌』大野充子

『空にうかぶ騎士』吉田甲子太郎(訳)

『川とノリオ』 いぬいとみこ
 『お母さんの紙びな』 長崎源之助
 『すいかの種』 沖井千代子
 『そして、トンキーもしんだ』 田辺まもる
 『ちいちゃんのかげおくり』 あまんきみこ
 『山へ行く牛』 川村たかし
 『えんぴつびな』 長崎源之助
 『ふるさとの空に返った馬』 木暮正夫
 『ロシアパン』 高橋正亮
 『父ちゃんの凧』 長崎源之助
 『おはじきの木』 あまんきみこ
 『悲劇の少女アンネ』 シュナーベル
 『世界一美しいぼくの村』 小林豊
 『いわたくんちのおばあちゃん』 天野夏美
 『たずねびと』 朽木祥

計・28 作品

3, 「一つの花」採用教科書リスト

「一つの花」採用教科書

※検定年度にて記載

◎:巻頭にコスモス写真あり

○日本書籍

- 昭和 49 年(1974)検定 小学国語 4 下 p.96~p.103
 - 昭和 51 年検定 小学国語 4 下 p.24~p.31
 - 昭和 54 年検定(57 年改訂検定) 小学国語四年上 p.90~p.99
 - 昭和 60 年検定 小学国語 4 上 p.100~p.109
 - 昭和 63 年改訂検定 小学国語 4 上 p.100~p.109(60 年度と同じ)
 - 平成 3 年検定 わたしたちの小学国語 4 上 p.64~p.73
 - 平成 7 年検定 わたしたちの小学国語 4 上(3 年度最終ページのみさしかえ)※要確認
 - 平成 11 年検定 わたしたちの小学国語 4 上(7 年度と同じ)
- ※ 平成 13 年検定以降 なし 「チイにいちゃん」に変更

○東京書籍

※昭和 60 年検定以前 なし

- 昭和 63 年検定 新訂新しい国語四上 p.82~p.93
 挿絵候補:池田源英、久米宏一、小泉るみ子、小関ひさ子、高峰至、滝原愛治、徳田秀雄、永田
 萌、藤城清治、松野伸彦
- 平成 3 年検定 新しい国語四上 p.78~89
 挿絵:変更なし
- 平成 7 年検定 新しい国語四上 p.74~p.85
 挿絵:緒方直青

- 平成 11 年検定 新訂新しい国語四下 p.4~p.16 ◎
絵:南塚直子
- 平成 13 年検定 なし 「世界で一番美しいぼくの村」に変更
- 平成 16 年検定 なし 「世界で一番美しいぼくの村」
- 平成 22 年検定 新しい国語四上 p.112~p.119
絵:南塚直子
読書の部屋
- ※「世界で一番美しいぼくの村」あり
- 平成 26 年検定 新しい国語四上 p.118~p.125
絵:伊勢英子
読書の部屋
- 平成 31 年検定(現行) 新しい国語四上 p.126~p.133
[物語の題名の意味を考えよう]
※コスモスを渡す挿絵のみ変更(遠くの三人からゆみ子とコスモスのアップへ)
- 学校図書
- ※平成 26 年検定以前 なし
- 平成 26 年検定 みんなと学ぶ 小学校国語四年上 p.130~p.137
しりょうへん
絵:川上和生
- 平成 31 年検定(現行) みんなと学ぶ 小学校国語四年上 p.140~p.
しりょうへん
挿絵は川上和生(変更なし)
【本文異同】※平成 26 年検定と比較
p.141 「喜び」(p.132)→「よろこび」
p.143 「なき顔」(p.133)→「泣き顔」
- 教育出版
- 51 年以前採用なし
- 昭和 51 年検定 新版国語 4 下 p.4~14
桜井誠、沢井一三郎、鈴木登良次、滝平二郎、深沢紅子、藤沢友一、山田史郎
- 昭和 54 年検定 小学国語 4 上 p.106~117 絵:中尾彰
- 昭和 57 年改訂検定 改訂小学国語 4 上 p.102~112
昭和 54 年のものと変更なし ※異同確認
- 昭和 60 年検定 新訂小学国語 4 上 p.70~80 ◎
改行などは異なるものの、本文異同なし
挿絵について、変更はないものの二枚目(コスモスを手にする場面)の建物が切れている(色味調整)
- 昭和 63 年検定 改定小学国語 p.70~p.80 ◎
昭和 60 年のものと同じ(手引き含めて)
最後の挿絵のみやや変更
- 平成 3 年検定 新版国語 4 下 p.4~14
昭和 54 年以降のものと構図が同じだが全面的に書き直されている(色味や服のデザインが変

更) ※異同確認

- 平成7年検定 国語4上 p.76~p.86
平成4年度のものと同様
※ここから今西の監修し
- 平成11年検定 国語4上 p.70~81
挿絵変更なし：レイアウト(大きさが変更されている)
今西祐行監修
- 平成13年検定 ひろがる言葉 小学国語4上 p.82~p.92
今西佑行(著作者)
挿絵:変更なし
- 平成16年検定 ひろがる言葉 小学国語4上 p.72~p.79
- 平成22年検定 ひろがる言葉 小学国語4上 p.82~p.89
平成16年とレイアウトなどは同じ

【本文異同】

p.84(p.74)「にぎりめし」→「にぎり飯」※漢字のため

p.85(p.75)「ぼう空頭きん」※漢字のため→「防空ずきん」

同「なき顔」→「泣き顔」

今西祐行(著作者)

- 平成26年検定 ひろがる言葉 小学国語4上 p.108~p.117
絵:岡田千晶
- 平成31年検定(現行) ひろがる言葉 小学国語4上 p.108~p.117

【本文異同】

p.110(p.110) 「喜びさ」→「よろこびさ」

○光村図書

- 昭和51年検定 小学 新国語 四年=下 p.4~13
絵・市川禎男
 - 昭和54年検定 国語四上 かがやき p.88~p.97
[心に残ったことは]
※二枚目のみ白黒に変更
- 【本文異同】
- p.88(p.4)「覚えた」→「おぼえた」
- 昭和57年改訂検定 国語四上 かがやき p.76~p.85 ◎
二枚目の挿絵が若干薄まっている以外に昭和54年のものと大きな違いはなし(学習含め)
 - 昭和60年検定 国語四上 かがやき p.73~83 ◎
絵:司修
 - 昭和63年改訂検定 国語四上 かがやき p.75~85 ◎
昭和60年検定と変化なし
 - 平成3年検定 国語四下 はばたき p.4~17 ◎
絵:石倉欣二
 - 平成7年検定 国語四下 はばたき p.4~p.17 ◎
絵:松永禎郎

- 平成 11 年検定 国語四下 はばたき p.4~p.17 ◎
挿絵・指導変更なし
- 平成 13 年検定 国語四年(下) はばたき p.4~p.14
挿絵自体は変更なし
- 平成 16 年検定 国語四下 p.4~p.13
挿絵変更なし
指導変更あり
- 平成 22 年検定 国語四上 かがやき p.62~p.72
[物語を読んでしょうかいしよう]
挿絵変更なし:二枚目のみ切られている(時計半分)
- 平成 26 年検定 国語四上 かがやき p.68~p.77
挿絵変更なし:二枚目が元に戻っている、五枚目が切られている
- 平成 31 年検定(現行) 国語四上 かがやき p.67~p.
挿絵変更なし
○大阪書籍
・ H7/8 は前と変化なし(絵:遠藤てるよ)
(H16 以降なし)
○三省堂
・ H22 年 補助教材採用
・ H26 補助教材採用